



第 8 図 Prague Castle



第 9 図 Charles Bridge

リカからも非常に多くの観光客が来ているのには驚かされた。外人旅行者はすべて IBUSZ という国営旅行社によって取り扱われるようになっている。共産圏でも滞在は極めて快適であるが、実生活にふれるといろいろ不自由なことがあるようである。たとえば、ホテルから小包を発送しようとしてもだめで中央郵便局の許可がいるといわれる。この許可をうけるのに 2~3 日はかかるとのことでもう断念せざるをえなかった。1956年の動乱の傷痕はあちこちの建物の弾痕としてまなまと残されていた。IMEKO 会議のレセプションでハンガリアンダンスを見せてもらったが赤いブーツのダンサーにホールの中へ引張り出されて踊らされたのには参ってしまった。あとで IFAC 会長のソ連の Letov 教授から “You are a brave man” とひやかされたのには冷汗三斗の思いであった。

プラハは東欧圏の中では最も西歐的な街で、夜も明るく広告のネオンサインが数多く輝いていた。Prague Castle (第 8 図) や Charles Bridge (第 9 図) など古い建造物が街に落ち着きを与えている。チェッコではなんといってもピルゼンのビールで、夜遅くまでピヤホールはジョッキを傾ける人達でいっぱいである。ピルゼンビールはアルコール分が強く普通 18 度、最も強いもので 24 度というから、調子によって飲んでるとすぐ酔っぱら

ってしまう。用心して飲むべきだろう。

ルーマニアには日本人の訪問が極めて少なく(ルーマニアとは正式の外交関係がない)、本当かどうか知らないが、筆者が日本からの工学関係学者の第 1 号というので大歓迎を受けた。新聞記者のインタビューまでやらされて閉口した。ルーマニアは黒海沿岸から石油がでるので石油精製工業が盛んで、国の経済も豊かのように感じられた。そのせいもあってか現在ブカレストの街では古い建物を取りこわして新しい街作りが大規模に進行している。4~5 階建てのしょうしゃな勤労者用アパート群がぞくぞくと建設されている。これらアパートの住居費が所得の数パーセントというから驚かされる。ブカレスト第一の建物はモスクワ大学風であるが、この建物が印刷工場で、ルーマニア全体の印刷を一手に引き受けているというから、さすがにお国柄である。ブカレストには農村博物館があってルーマニア各地方の農家の建物を調度とも移してきて展示しているが興味深かった。農村の生活は素朴で貧しいようであった。ルーマニアにはけわしい山もあり、また海もあって風景に恵まれている。ブカレストから 100 km 以上離れた Sinaia の離宮(革命前ルーマニアは王制)に Penescu 教授の案内でドライブしたが、その風景は実にすばらしかった。この離宮やブカレストの城は大学教授や芸術家の憩いの場として利用されている。共産圏においては大学教授も特権階級に属していることを知らされた。Penescu 教授は筆者の滞在がもう一日長ければ黒海沿岸の保養地へ自分の車(チェッコ製スコダ小型車)で連れてゆくのだがと残念がっていた。この保養地は最近建設されたのだそうでルーマニアご自慢のものようである。スケジュールの都合もあってとうとう保養地行きは断念したが惜しいことをしたと思っている。ブカレストで東欧三国の旅を終えルーマニア航空のソ連製イリュージン 14 の双発プロペラ機で一路ウィーンへと飛んだ。(1961 年 11 月 13 日受理)

正 誤 表 (12月号)

頁段	行	種別	正	誤
30	右 2	本文	$-v^2$	$v^2$
"	" 5	"	$v$	$V$
33	左 下より 2	"	No. 13	No. 11
35	右 下より 1	"	…あるかがわかるで…	…あるがわかるかで…